

# 朱い月はなにを見る

葛城 大河

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

吸血鬼など魔族と呼ばれる存在が、当たり前のように居る世界に、一人の少年が転生した。前世とは違う世界に驚いた彼であったが、ソレも数年はすれば、すっかりと順応する。そんな平和な日常を、高校で知り合った友人————暁 古城と過ごしてたある日。

とある転機が訪れた。夜に小腹が空いた彼は、コンビニでなにか食べ物を買に行つた時、そこでその者たちと邂逅する。そうして起きた戦闘に、彼は今まで気付きはしなかつたチカラに気付いた。そう、この世界に転生した彼は強力なチカラを持つ存在になつたのだと理解したのだつた。

# 目次

始まりの朱き月

1



## 始まりの朱き月

「——『墮ちろ』」

一言が静かに紡がれる。ただ小さく呟かれた、その言葉に眼前の模造天使は全身に異常なまでの衝撃を受けた。

「——ツツツツ!?」

苦痛の声を漏らし、先の言葉通りに地面に落下する。だが、ソレを許す彼女ではなく、全力で力を解放し、離脱しようとする。だが、

「誰が抗う事を赦した? 私と言った筈だぞ。『墮ちろ』」

その声が彼女の抵抗を、拒んだ。全身にのし掛かる、先程よりも強大なナニカ。ソレ

に耐える事が出来ず、彼女は地面に激突した。砂塵が舞う中、またしても声が響く。

「ふん、まだ生きているな。存外にしぶとい。——『弾けろ』」

何処か鬱陶しそうに告げた後に、紡がれる一言。次いで鳴り響く轟音。それと共に、砂塵から吹き飛ぶのは、先程の天使の姿だ。何度も地面を転がり、なんとか態勢を戻そうとする天使だが、また何処からか声が降ってくる。

——『弾けろ』と。

その声が紡がれると共に、天使は右から左、上から下にへと抵抗が出来ないまま、吹き飛ばされていく。苦痛の声を漏らしている事から、ダメージを負っている事は誰からも明らかだ。それ故に信じられなかった。なす術もなく一方的に蹂躪している光景が。

だから、彼は叫ぶ。信じられないというように。男——かなせ叶瀬けんせい賢生はあり得ないと声を張り上げた。

「馬鹿なツ!!?」

一体どういう事だ!!?

何故、別の位相に存在する

天使に攻撃が出来るツ!!?」

そうそれが驚愕の理由。自身が作り上げた天使。エンジェル・フォウ模造天使は天使に近い力を手に入れた筈だ。その天使には、この世界の攻撃が効く筈がない。そもそも、格が違うのだ。なのに、何故、と男は疑問が付かない。そんな賢生の疑問に声が降ってきた。

「何故、攻撃が出来るだと?」

別位相に存在する天使だと?

なにを

驚いている。元より私には、関係のない事だ」

まるで、それが出来て当然だというように、言葉が流れる。それに、賢生は声が降ってきた方向、つまり上空に顔を向けた。そこに居たのは、一人の男だ。金色の、いや黄金の髪をもった虹色に輝く万華鏡のような瞳の男だ。男は賢生の視線に気付き、少し口の端を持ち上げると、言った。

「例え別位相に居たとしても、我が魔眼がソレを捉える事が出来る。ならば、攻撃が通るのは当然ではないか」

「……………捉える、だど？」

ま、まさか貴様は!?？」

男の告げた言葉に、最初は訝しむ賢生だったが、数秒後に理解すると絶句するしかない。と、そんな時。上空に浮かぶ男は、視界の端で動き出そうとする模造天使に気付いた。

「ほう、まだ動くか。ならば、これならどうだ」

虹色の万華鏡で、動き出そうとする模造天使の少女に、視線を固定させて、口を開いた。先程と同じくたった一言を。しかし、さっきとは違う言葉を紡いだ。

「——『歪め』」

瞬間。キシリツと、模造天使の周囲の空間が文字通りに歪む。突然起きた異常な現象。ソレに模造天使は必死に抗ってみせる。しかし、その歪みは天使の体を蝕み、捻れていく。ギチギチと体から異音を鳴らす天使。そして言葉にならない悲鳴。ソレを聞きながら、黄金の髪を持つ男は、再度紡ぐ。





「……………古城か」

「もう辞めろ真夜。今、お前が攻撃してるのは叶瀬なんだぞ!!?」

少年——あかつきじょう 暁 古城は言う。あの模造天使の正体を。自分たちの後輩だと。彼は

友人である男にそう告げた。何故、あいつにあんな力があるかは分からない。しかし、それ以上はダメだと止めに入る。すると、幾重にも放たれた雷撃が止み、上空の男は古城に向けて口を開いた。

「あの者が叶瀬 夏音だという事には気付いている。だから、安心しろ古城。別に私は、彼女を殺す気はない」

男は己の友人である少年に、安心しろと告げる。そう、元より彼は模造天使たる少女を殺す気はなかった。ただ、彼女の力を削ぐ為にアレだけの攻撃を浴びせたに過ぎない。

(そうは言ったけど、如何したもんかなあ。如何やって叶瀬を元に戻そうか。ってか、今更だけどなんで“俺”はこんな事に巻き込まれてるんだよ)

内から出掛けたため息を飲み込んで、彼は胸中でそう言う。

(それになんで戦闘時になると、俺の口調が「私」に変わるんだよ)

前々からの疑問の声を胸中で漏らす。そもそも、つい最近までは比較的平和に暮らしてなかったか？

と過去を思い出す彼だ。それなのに、何故こうなったと彼は思うが、答えが出て来ない。思えば、日常が狂え出したのは、あの夜に殲教師せんきょうしと出会ってからだと思ひ出す。

(そうだ。全部アイツの所為だ。そうに違いない)

今は居ない男の姿を思い出し、八つ当たり気味に、彼の所為にする男だ。そう胸中で、巻き込まれた理由を探していると、自身が叩きのめした模造天使が起き上がっており、凄まじい速度で、こちらに肉薄してくる。ソレに彼はあれ程までに実力差を、見せ付けて尚、突撃してくる模造天使に呆れた声を漏らす。

